

2. 柿本人麻呂の歌

2.1 人麻呂 雷山の絶唱

万葉集に載せられている人麻呂の歌は 長歌 19 首、短歌 75 首及び“人麻呂歌集に出づ” 275 首と大変多く 枕詞、序詞、押韻などを駆使した格調高い歌風で 万葉集第一の歌人と一般に称せられている しかし その人麻呂の名は正史の日本書紀、続日本紀には全く現れない 人物史の姓氏録にも見当たらない

その理由について 6 位以下の下級官僚だった（契沖、加茂真淵らの説）政争に巻き込まれて刑死

（水死）したので削除された（梅原猛の説）などと解説されているが 全く説得力に乏しい ただ一人 古田武彦は人麻呂を“九州王朝の宮廷歌人”としている その根拠を見てみよう

天皇、^{いかづちのおか}雷丘^{ひでま}に御遊しし時、柿本人麻呂の作る歌一首

卷3 235 大君は神にし座せば^{あまくも}天雲^{いほ}の雷の上に廬らせるかも

右、或る本に日く^{わかかへの}忍壁皇子に^{たてまつ}献るといへり （忍壁皇子は天武の子）

その歌に日はく 王は神にし座せば雲隠る雷丘に宮敷きいます

この歌はただに万葉集の秀歌と言うより 日本精神を代表する名歌として 戦前には喧伝された歌である

賀茂真淵「天皇は^{うつ}顛し神にます故に 雲の中の雷の上にみやみさせますとなり 丘の名によりて

ただに天皇のはかりがたき御いきほいを申せりける」

伊藤博文著「憲法義解」明治憲法第三条「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」案出のもとにした 斎藤茂吉「一首の意は 天皇は現人神にましますからして今や天空に轟く雷の名を持っている山の

上に行宮を御作りになって御入りになり給うた」

古田がこの「雷丘」とされる奈良県明日香村の^{いかづちのおか}雷丘を訪ねるとそこにある丘は高さ 10 メートルのまことに低い小丘であり登るのに 5 分もかからないから 丘の上で天皇の小休止は有り得ても

「廬らせる」と表現するのは奇妙の感を覚えた まして小丘に登る天皇を「大君は神にしませば」

と表現するのも馬鹿げていると感じたのである

一方 福岡県前原市（筑前）の^{らいざん}雷山を訪ねると 高さ 955 メートルで北に玄界灘、東に博多湾、西に唐津湾を擁しているから 連日「天雲」におおわれている

当山には^{いかづちしや}雷社があり上宮・中宮・下宮が配置され上宮には三社が配置され中央にニニギノミコ

ト

左右に天神七柱・地神五柱が祀られていたという（今は中腹に遷されている）

この歌が詠まれた時は 7 世紀末 白村江の敗戦の後で 多くの将兵が百済の海に没し 筑紫には唐の占領軍が駐留していた 庶民の家々は働き手を失っており生活は苦しく荒廃していた 民の

雄幸 井澤 2023-02-20 19:42



削除された内容: ^{うつ}顛

庵は荒れ果てていたのである

その荒れた家々の中を歩いて人麻呂が雷山に登ると そこに九州王朝の始祖たるニニギノミコトを始め 天神・地神が祀られていたのである その姿を詠んだのである

唐との無謀な戦いに突入し自己の将兵多数を異国の海の藻屑と化せしめた筑紫朝の君主も 今は死んでいて 先祖と共にこの山に眠っていると認識で 人麻呂が詠んだのである

人麻呂を明日香村の^{いかずちのおか}雷丘に置けば その作歌態度は御用歌人のへつらいと見做されるが

筑紫の雷山に置けば 白村江の悲劇を絶唱した名歌に生まれ変わる

8世紀初頭の元明天皇・元正天皇詔勅で 九州王朝関係の文書が全て禁書とされていたが

人麻呂の名歌が消えることを惜しんだ万葉集編纂者が 人麻呂の名を残すことを決意し 場所を大和に変え 大和朝の皇族の名とも関連付けて残したのである

下記も同様のケースである

長皇子^{ながのみこ} 狛路の池に遊^{あそ}ぶ時に 柿本人麻呂の作る歌 (長皇子は天武の子)

卷3 241 大君は 神にしませば 真木の立つ 荒山中に 海を成すかも

(原歌 : 皇者 神余之坐者 真木乃立 荒山中余 海成可聞)

岩波本「わが皇子は神でいらっしゃるから 真木の立っている荒れた山の中にも 海をお作りになることである」

斎藤茂吉「皇子が山林を拓いて池を掘ったために 海を成すかも と言ったものと見える しかしここは池の水を豊かに湛えていたのを以って 海をなすかもと言い 皇徳を讃えたものと看るべく その時池は存在しなくてもよいのである」

山田孝雄「吾大王は神にておはしませば かかる山中にも 海をつくりたまふよとなり 皇子の威徳に帰し奉るままにうたひしならむ」

中西進「大君は 神でいらっしゃるのよ 真木しげる荒々しい山中にまで海をお作りになることよ」

古田は この歌の詠まれた地を大和でなく福岡県の雷山とする

「^{すめらみ}皇は 神にしませば 真木の立つ 荒山中に 海鳴りせずかも」

代々の王者は すでに死んで神になっていらっしゃるから 美しい木々の立ち並ぶこの荒れた山の中に 海鳴りを響かせておられます

雄幸 井澤 2023-02-20 19:42



削除された内容: ^{すめらみ}皇

天の香具山も場所を九州に移すと 歌が生き返る

卷1 2 舒明天皇御製 (第34代)

山常には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は

煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ あきず島 八間跡の国は

契沖、加茂真淵は 香具山の形を褒めていると評したが 大和盆地では ①海が見えない

②鷗がない ③とりよるふと言っても周りの山より低い ④煙がいつも立つことはない などの批判があった

場所を九州の別府湾に面している鶴見岳 1375メートルに移すと 将ににびったりする 安萬と

いう地名がありかぐつちの山と呼ばれていた経緯もある ここなら海も鷗も山の高さも煙(別府

の

川にはいつも湯けむりが立つ)も 文句なしに条件を満たしている 情景に相応しい名歌となる
卷1 28 持統天皇御製 (第41代)

春過ぎて 夏来るらし 白妙の衣乾したり 天の香具山

飛鳥の香具山は 大和盆地から見て52メートルの高さで 白布を掲げても見えにくい

(NHK撮影班が撮影を試みたが失敗)

別府湾の鶴見岳に場所を遷すと その山中に神社が有って その広い境内に宮司や巫女の衣を乾す場面が見られる 夏の到来を実感できる

(飛鳥の香具山は小さな祠が有るだけで生活の場ではなく衣を乾すこともない)

筑紫朝の天子の名を 大和朝の君主名(舒明・持統)に置き換えて 歌が残されたのである

2.2 消えゆく「遠の朝庭」

柿本朝臣人麻呂 筑紫国に降る時に海路にて作る歌

卷3 304 大王の 遠の朝庭とあり通ふ 嶋門を見れば 神代し思ほゆ

「朝庭」の言葉は他の歌にも見られるが 中国では史記、漢書、三国志、旧唐書のいずれを見ても 天子の中央政庁を指しており それ以外に用いられた事例は皆無である

それに倣うとこの歌の解釈が難しくなる

そこで契沖が万葉代匠記で「朝庭とは大宰府のみならず国司が府中に在って君命を行う場所」と説明してから 現代の解説書もそれに倣って説明している

万葉集で 遠の朝庭の語が出てくる事例を見よう

卷5 794 山上憶良

「大王の 遠の朝庭と しらぬひ筑紫の国に . . .」(長歌の冒頭)

卷6 973 聖武天皇(藤原宇合を西海道節度使に任命の折)

「食国の 遠の御朝庭に 汝等し 斯く罷りなば 平らけく 朕は遊ばむ . . .」

卷15 3668 阿部継麿(遣新羅大使の阿部が筑前国に立ち寄った時)

「大君の 遠のみかどと 思へれど 日長くしあれば 恋ひにけるかも」

卷15 3688 雪連元満の家人(韓国に派遣された雪連が途中の壱岐島で急死した折)

「天皇の 遠の朝庭と 韓国に渡るわが背は . . .」(挽歌の冒頭)

卷20 4331 大伴家持

「天皇の 遠の朝庭と しらぬひ筑紫の国は . . .」(長歌の冒頭)

全ての歌が筑紫に関連していて その所在地が筑紫であることを示している (しかも 聖武天皇は御朝庭と敬称している)

契沖の説明には無理が有り 素直に解釈すれば その地に天子の中央政庁が有って朝庭と呼ばれていたことを認めざるを得ないだろう

又 人麻呂の歌の嶋門について 島と島の間、島と陸の間の瀬戸など諸説があり 具体的には

① 明石海峡②吉備の児島付近③関門海峡として説明されている しかし どの説明も「神代し

思ほゆ」の語句としっかりと対応しない

古田の提示するのは「博多湾頭」である。海路から博多湾に入ろうとすると右に能古島、左に志賀島が見える。能古島は国生み神話のオノコロ島の原形と目されている。志賀島（後に金印が発見された島）との間には現在の福岡市が見えている（見えないがその奥には現在の太宰府市が在る）

右手前方に高祖山連峯が見える。古事記の天孫降臨の記事に「竺紫^{ひむか}の日向の高千穂のクシフル^{なげ}峯に天降りまさしめき」と書かれているそのクシフル峯である

この地点からの景観は人麻呂の歌にピッタリ対応している

（尚 中国では 王族の最高官位が太宰であり その政府を太宰府と呼んでいた）

学者たちが九州王朝を否定したために “朝庭”の説明に苦しんだことがよくわかる

2.3 近江のまぼろし

近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本人麻呂の作る歌

卷1 29 玉禪^{たまぜん} 叡火の山の檀原^{かしのらひじり}日知の御代^あゆ 生まれまし 神のことごと 樛^{つが}の木の いやつぎ
つぎに天^{あめ}の下 知らしめししを 天^{そら}にみつ 大和^{やまと}を置いてあをによし奈良山を越え いかさまに
思ほしめせか 天^{あまざか}離る^{ひた}夷にはあれど 石^{いしばし}走る^し淡海^{あふみ}の国^{きざなみ}の浪^{なみ}楽^らの 大津の宮に天^{あめ}の下 知らしめけ
む天皇の 神の尊^{みこと}の大宮^{おほのみや}は 此^{こゝ}処^{ところ}と聞^きけども大殿^{おほのみや}は此^{こゝ}処^{ところ}と言^いへども春草^{はるぐさ}の 繁^{しげ}く生^なひたる 霞
立ち 春日^{はる}の霧^{きり}れる ももしきの大宮^{おほのみや}処^{ところ} 見れば悲しも

30 ささなみの 志賀^{しげ}の辛崎^{しんさき} 幸^{あゆ}くあれど 大宮^{おほのみや}人の 船^{ふね}待^{まち}ちかねつ

31 ささなみの 志賀^{しげ}の大^{おほ}わだ 淀^{いづ}むとも昔^{むかし}の人に またも逢^あわめやも

ほとんどの解説書（契沖、加茂真淵、現代の岩波本など）は 第38代天智天皇が開いた大津の都が 壬申の乱後 大海人皇子が飛鳥の浄御原に都を遷したので 今は荒れ果てているのを嘆いた歌だとしている

しかし 人麻呂の多くの歌は7世紀後半に詠まれたと考えられ 天智や壬申の乱で敗死した大友は

人麻呂にとって同時代（あるいは少年時代）の人に当たり “昔の人”とは言い難い 又 この時代は 天武や持統（天武皇后から即位）が勝利者として君臨している状況にあり その敗者（大友）に哀惜を注ぐ歌を詠むのは難しい状況だったと思われる

尚 人麻呂には 別途 近江を詠んだ歌が有る

卷3 264 もののふの 八十^{やそ}氏^{うぢ}河^がの網^{あみ}代^{しろ}木^ぎに いさよふ波^{なみ}の 行く方^{ゆくまじ}知らずも

266 淡海^{あふみ}の海^{うみ} 夕^{ゆふ}波^{なみ}千^ち鳥^と汝^にが鳴^なげば 情^{こころ}もしに いにしへ 思^{おも}ほゆ

そこで 長歌をもう一度読み返してみよう

長歌には 神武以来の大和の国を捨てて奈良山を越え 何と思ったのかこの田舎に大宮を建てたとの文言がある 大和から初めて近江へ遷都したのは 第12代景行天皇である（天智の前に

16代仁徳が難波に 36代孝徳も難波に遷都した）

景行の後の14代仲哀まで近江に都が在り 仲哀は九州の熊襲を討とうとして近江を出て 筑紫まで赴いたとき その地で急死する その折 神功皇后が神託を得て 熊襲でなく新羅を討つことになり それを果たした後 筑紫に戻りその地で男児を生む（後の応神天皇）

近江では 仲哀の妃から生まれた太子香坂王と次子忍熊王が 留守を守っていたが 神功皇后が 男児を擁して帰還するとの報を聞いて 自分たちの地位を危惧する
そこで九州征討軍が船を降りる摂津の国で迎え討とうとしたが 香坂王が直前に事故死してしまう
忍熊王は本拠に近い山城まで戻り堅陣を構えたが 神功皇后と参謀武内宿禰の計略にかかり
結局 湖に身を投げて自死する
尚 日本書紀には武内宿禰の歌が載っている

淡海^{あそ}の海 瀬田^{せり}の濟^{かづ}に潜^{ひそ}く鳥 目にし見えねば 慎^{いそ}しも

(然うして 後に 日移^{ひうつ}て 菟道^{うみち}河に出づ)

淡海^{あそ}の海 瀬田^{せり}の濟^{かづ}に潜^{ひそ}く鳥 田上^{のりかみ}過ぎて菟道^{うみち}に捕^{とら}へつ

(忍熊王の死体を探していたが漸く捕らえたと喜ぶ歌)

(上記の人麻呂の 264 の歌は この経緯をとらえた歌である)

人麻呂の歌にある 近江の荒れた都とは 仲哀の都であり 待ちかねた大宮人は仲哀で また逢いたいのは忍熊王であった

このように解釈すれば表面上無理が無いと 古田は説明する

そして その実は (当時の人も感じたであろうが) 大友皇子の悲劇を詠んでいたのである

2.4 古集の存在

巻7 1246 の歌の後に「右の件^{くだり}の歌は古集中に出づ」と書かれており古集の存在が示されている

そこでそれまでの歌を溯ると 1161「羈^{かり}旅にして作る歌」と題した連作の頭に行き着く
従って古集中の歌は 1161~1246 の86首と見做すことが出来る その中には優れた歌の多いことに気づかされる 又 万葉集に九州人の歌がほとんど無い中で この古集の歌の多くが筑紫の人の手になると思われるのである

興味深いことに 人麻呂は これら古集中の歌に発想を得たと思われる歌を何首も詠んでいる

1238 高島の 阿戸白波はさわくとも われは家思^{いへ}ふ 廬^{いほり}悲しみ

133 小竹^{こたけ}の葉は みやまもさやに乱るとも われは妹思^{いへ}ふ 別れ来ぬれば (人麻呂)

1231 天霧^{あまぎり}らひ 日方^{ひかた}吹くらし水茎^{みづくき}の 岡^{みね}の永門^{ながと}に 波立ちわたる

1088 あしひきの 山川^{やまがは}の瀬^せの響^{なづ}るなべに 弓月^{ゆづき}が獄^{たげ}に 雲立ち渡る (人麻呂)

1240 玉くしげ 見諸^{みもろ}戸山^{とやま}を行きしかば 面白^{おもしろ}くして 古思^{いにしへ}ほゆ

266 淡海^{あそ}の海 夕浪^{ゆらぎ}千鳥^{ちどり}汝^ぬが鳴けば 情^{こころ}もしのに 古思^{いにしへ}ほゆ (人麻呂)

名人と言われた人麻呂も 先人の歌を手本に 作品を磨いたのではなからうか

尚 短歌の世界には 本歌取りと呼ばれる作法がある

古歌の 語句・趣向などを取り入れて作歌する方法で 7世紀の人麻呂からずっと時代が降って新古今和歌集(1205年)の時代に盛んに行われた

例えば

万葉集 巻3 365 苦しくも 降り来る雨か 三輪^{みづら}の埼 狭野^{せうの}の渡りに 家もあらなくに

新古今 藤原定家 駒とめて 袖ふりはらふかげもなし さのわたりの 雪の夕暮れ
後拾遺集 快覚法師 さ夜ふくる ままにみぎはや氷るらむ 遠ざかりゆく 志賀の浦波
新古今集 藤原家隆 志賀の浦や 遠ざかりゆく波間より 凍りて出づる 有明の月
万葉集 柿本人麻呂 あしひきの 山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜をひとりかも寝む
新古今集（百人一首） きりぎりす 鳴くや霜夜のさむしろに 衣かたしき ひとりかも寝む

尚 何でも真似して良いわけではない

藤原定家が示しているマナーは

- ① 最近 70～80 年以内の歌は使用しない（古い歌で誰もが知っている歌が良い）
- ② 同じ語句は 2 句まで
- ③ 同じ主題にすると新鮮味を欠くので ジャンルを変える

以上